子由の澠池懐旧に和す（蘇軾）

人生到る処知んぬ何にか似たる
応に似たるべし飛鴻の雪泥を踏むに
泥上偶然指爪を留むるも
鴻飛んで那ぞ復東西を計らん
老僧は已に死して新塔と成り
壊壁には旧題を見るに由無し
往日の崎嶇たるを還お記するや否や
路長く人は困しみ蹇驢嘶くを

人生到處知何似　應似飛鴻踏雪泥
泥上偶然留指爪　鴻飛那復計東西
老僧已死成新塔　壞壁無由見舊題
往日崎嶇還記否　路長人困蹇驢嘶

解説　二十六歳の時、鳳翔府簽判の任に赴く途上、弟の轍の「澠池を懐いて子瞻兄に寄す」の詩に和して作ったもの。

語釈　※子由＝弟の轍の字。※泥池＝河南省洛陽の西六十キロの所にある。※懐旧＝昔をしのぶ。※知何似＝何にたとえてよいかわからない。※鴻＝水鳥。※那＝何と同じであるが、ややくだけた感じ。※老僧＝五年前に世話になった老僧で、名を奉閑といった。※新塔＝僧が死ぬと火葬して、その骨や灰を石塔に蔵した。※旧題＝五年前に、書きつけた詩。※往日＝父に伴われて旅した日のこと。※崎嶇＝やまみちのけわしく歩きにくいこと。※記＝記憶する。※蹇驢＝びっこのロバ。

通釈　人生のさすらいは、一体、何に例えたものだろうか。それは舞いおりた雁が雪どけの泥水にひょいと足を踏むようなものだ。泥の上には、たまたま足あとを残してはいるが、雁が飛び去ってしまえば、もうどっちへ行ったかわかりはしない。老僧はすでになくなって、新しい塔に入っているし、くずれた寺の壁には、かつて書きつけた筆の跡を捜すすべもない。君はあの日の山路の旅の苦しさを今もなお覚えているかい。果てしなく続く旅路に、旅人はつかれ、びっこのロバがしきりに嘶ないていたことを。